東洋英和女学院大学死生学研究所・(公財)国際宗教研究所 共催「生と死」研究会第15回例会

シンポジウム 生と死をめぐる地域・実践活動

2016年11月19日(土)14:40-17:50 司会 渡辺和子 東洋英和女学院大学教授 死生学研究所所長

発題1 奥野滋子（おくの しげこ）

順天堂大学医学部客員准教授

健康とは何か —地域で支え、看取るために

■ プロフィール

金沢医科大学医学部卒業。順天堂大学医学部麻酔・ペインクリニック科学講座、総合病院衣笠病院ホスピス、神奈川県立がんセンター緩和医療科、順天堂大学医学部附属順天堂医院がん治療センターを経て、現在順天堂大学医学部緩和医療学研究室客員准教授。医療法人社団若林会湘南中央病院在宅・緩和部門長。医学博士。2010年に本学大学院人間科学研究科(宗教学分野)修了。人間科学修士。人間科学・宗教をベースにした医療の可能性を探る。

■ 主要業績

「緩和医療医として患者から学ぶ死生観」『死生学年報2010』リトン、2010。「伴侶を亡くした男性の二事例ー緩和医療現場での学びー」『死生学年報2011』リトン、2011。「緩和医療現場における『お迎え』現象とその周辺」『死生学年報2014』リトン、2014。『ひとりで死ぬのだって大丈夫』朝日新聞出版、2013。『「お迎え」されて人は逝く』ポプラ社、2014。『対話する死生学 喪失とともに生きる』ポラーノ出版、2016。ほか

内容紹介：

人は古より無病息災、健康維持を願ってきました。そして現代人も「思い通りにならない健康」を一所懸命努力し、高齢に伴う自然な身体変化に対しても「思い通りにしようとし続けている」のではないでしょうか。そして医学的診断がついた途端、生活のすべてが「病気」一色に染まってしまう患者さんがたくさんいます。一方で、「私は末期がん患者だけど、こうして自分の家にいて、好きなことをしていると、『私ってすごく健康』と思える」と語った患者さんに出会いました。緩和ケア医の視点で、患者さんの語りを手がかりに「健康とは何か」という問題を再考してみたいと思います。

発題2 小川有閑（おがわ ゆうかん）

大正大学地域構想研究所主幹研究員

死別体験のある子どもとその後

■ プロフィール

大正大学地域構想研究所・BSR推進センター主幹研究員、浄土宗蓮宝寺住職。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程満期退学。現代社会の仏教者の社会的責任(BSR)を研究するかたわら、僧侶として自死予防や遺族支援、グリーフケアにも関わる。2014年、子どものグリーフケアを目的とする一般社団法人The Egg Tree House設立に関わり、現在、理事をつとめる。

■ 主要業績

「自死者のゆくえ—僧侶なりの自死遺族支援の形—」国際宗教研究所編『現代宗教2011』秋山書店、2011年。「自死者と遺族の対話—宗教的グリーフケアへの一視座—」『死生学研究所死生学年報2012』リトン、2012。

内容紹介：

親やきょうだいを亡くすことは、子どもにどのような影響をもたらし、どのようなサポートが必要となるのでしょうか。友達に話すことができずにいる子もいます。なかには、家庭の中でも、亡くなった家族について話すことができない子もいます。その子にとって、とてつもなく大きな体験だったにもかかわらず、そこにフタをして過ごすことは苦しいことでしょう。そのような子どもたちが、安心して遊び、話しができる場所を始めて丸2年。そこから学び、感じたことをもとに、子どもが生き生きと過ごすために私たちに何ができるのか、皆さんと一緒に考えたいと思います。

発題3 高橋 原（たかはし はら）

東北大学大学院実践宗教学寄附講座准教授

ケアの現場に求められる宗教性とは何か

■ プロフィール

国際宗教研究所研究員、東京大学宗教学研究室助教を経て、東北大学文学研究科実践宗教学寄附講座准教授。公共空間で心のケアを提供する宗教者＝臨床宗教師の育成事業に取り組む。専門は宗教心理学。

■ 主要業績

『ユングの宗教論——キリスト教神話の再生』専修大学出版局、2005年。「臨床宗教師の可能性-被災地における心霊現象の問題をめぐって」『現代宗教2013』国際宗教研究所、2013。「誰が話を聴くのか？—被災地における霊の話と宗教者」『死生学年報2014』リトン、2014年。

内容紹介：

東日本大震災以降、さまざまな現場で宗教者が「心のケア」に関わることが増えてきており「臨床宗教師」の育成も各地で始まっています。宗教者の意識、また医療や福祉に携わる人々の意識が変わってきたとともに、「心のケア」の概念自体も変化し、広いものとして理解されるようになってきた結果だと考えられます。では、宗教者でなければできない関わり方、宗教者ならではのケアとは何でしょうか。傾聴、スピリチュアルケア、儀礼の提供、教えを説くことなど、さまざまな実践の形があります。実際にケアの現場で働いている宗教者の活動を材料に、彼らに何が求められているのか考えてみたいと思います。

❑ シンポジウム会場
東洋英和女学院大学大学院
（六本木）205教室
東京都港区六本木5-14-40
shiseigaku@toyoeiwa.ac.jp

❑ 最寄駅 六本木駅（日比谷線徒歩10分）
麻布十番駅（大江戸線徒歩5分、南北線徒歩7分）
❑ 参加費1,000円（本学院在校生・教職員無料）
❑ 当日先着順100名様 ❑ 事前申込み不要

〈予告〉 2017年 1月14日(土) 受付開始14：10
東洋英和女学院大学死生学研究所〈公開〉連続講座「生と死に寄り添うⅡ」

第 9回 大林雅之「老いにおける性と死」
第10回 森下直貴「老人世代の働き方—老成学からの視点」